

### 沖縄に生まれた共通語：音韻・アクセント 篇

永田, 高志

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

88

(終了ページ / End Page)

117

(発行年 / Year)

1993-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012607>

# 沖縄に生まれた共通語

## (音韻・アクセント篇)

永田高志

### 1. はじめに

日本語の方言は沖縄方言と本土方言に二大区分されるということに関して学界の意見は一致している。そして、沖縄方言と本土方言とは、服部四郎氏<sup>\*1</sup>の言語年代学的測定によれば「今から約1450年ないし1700余年前」に分岐したと考えられ、現在では本土方言話者には沖縄方言は理解不可能になっているといっても過言ではない。しかし、沖縄においても、廃藩置県以降、過激と思える共通語教育<sup>\*2</sup>が普及し、現在では方言は消滅の危機に面し、沖縄方言学者の間では、方言資料採集の急務が叫ばれているのが現状である。しかし、共通語化が盛んであるといっても、沖縄において使われている共通語は、全国共通語とは少々異なり、地域共通語の性格を有する言語<sup>\*3</sup>となっている。また、沖縄内でも、各地で使われる地域共通語が異なり話者の出身地が推察できるほど、それぞれの特異性を有している。沖縄・奄美知識層はこの地域共通語を沖縄では「ウチナーヤマトグチ」（沖縄大和口、口は言葉という意味）、奄美では「トン普通語」「ハンスー普通語」（トンやハンスーは奄美方言で芋を表す）と呼び、全国共通語の誤った使い方という認識で蔑視していた。しかし、沖縄方言が消滅しつつある現状では、この地域共通語が将来唯一の沖縄の地域方言となることが予測され、筆者は在来の沖縄方言を沖縄旧方言、新しい方言を沖縄新方言と名付けたい。また、共通語化の度合が、沖縄内でも島々によって異なる。この論文では、対照言語学的な面<sup>\*4</sup>から音韻に焦点を絞り記述していくことにする。

前稿<sup>\*5</sup>では文法に焦点を絞り方言区画上上位区分される沖縄各島の中心的地域でどの様に共通語化が進んできたかを見てきた。結論として、新方言は旧方言の文法体系をそのまま継承し、語彙だけを共通語の語彙とすり替えた言語である事が分かった。沖縄の共通語化の問題を考えるに当たっては、二言語併用（Bilingualism）<sup>\*6</sup>の観点から考察する必要があると思われる。共通語化の過程を時期別に分けてみようと思う<sup>\*7</sup>。

第一期…学校教育を通じて共通語が導入された100年ほど以前当初は旧方言が母語であり共通語を外国語のように習得してきた。「沖縄対話」<sup>\*8</sup>や桑江良行氏<sup>\*9</sup>の「標準語対照沖縄語の研究」を見れば、沖縄県人が共通語を外国語のように学習してきた事が分かる。ちょうど我々日本人が英語を学習するに当たり母語日本語からの干渉で日本人の英語が母語として話されている英語と異なるのと同様に沖縄での共通語が沖縄旧方言の言語体系を継承した形で新方言を造りだした。第一期では旧方言が母語であり新方言は第二言語であった。そして、

使用場面からみると新方言はあくまで外部者に対してや、公式場面でのみ使われる公式言語であった。現在では老年層がこの時期に言語形成期を送った人々である。筆者が沖縄新方言の調査に携わり出して15年が経とうとしているが、調査の対象になってくださった人々の中で筆者の共通語を理解できなかった人は二人しかいない。ともに外部との接触無しに生活を送る事のできた女性であり年齢も80歳を越える人々であった。第一期の最初の世代では共通語を理解するのに困難な人々もいたと思えるが最近では新方言を第二言語として習得していない老年層の世代は終わっているように思う。

第二期…新方言が更に発展し、旧方言と新方言を対等に使い分けている等位併用時代<sup>\*10</sup>になった。旧方言は老年層及び同世代に、新方言は同世代及び年下の世代に使っていた。場面的にも、公式場面では新方言、私的場面では旧方言と新方言と使い分けていた。私的場面においても同世代や年下に対しては新方言が使われるようになり、生活言語としても新方言が使われるようになった事が第一期と大きく異なる点である。現代の中年層がこの時期に言語形成期を送った人々である。しかし、この世代の使う旧方言は老年層の旧方言より共通語化の影響をより受け特に語彙の面で在来の語彙から共通語の語彙に変化している。旧方言の中でも敬体と常体があり、目上のものには敬体で話すのが正しいとされるが、第二期の話者では敬体を失っているものが多い。即ち、方言の敬語というものは方言社会の構成員となって後に学ぶべきものであるが、方言社会が弱体化しつつあり旧方言の敬体は学習されていないものが多い。第二期の話者は私的な場面で使う常体の旧方言しか持っておらず、敬語を使うべき場合には全国共通語の敬語を使う事が多い<sup>\*11</sup>。

第三期…新方言を母語として旧方言は理解できない、また、理解できたとしても使用できない時代になった。新方言の単一言語話者の時代である。各島の言語生活の事情により差異はあるがおよそ30歳以下の現代の若年層はこの世代に当たる。現代の若年層では同世代間では当然新方言を使い、またこの世代に対しては中年層はもちろん老年層も新方言を通じて会話をしている。どうして若年層に対して旧方言を使用しないのかという質問を老年層に対して行ったが、若年層は旧方言を理解しないし、また時代的に旧方言を生活言語として使う時代は終わったという意識が強い。

第四期…さらにテレビ等のマスコミ、学校教育を通じての共通語教育、観光客との交流、本土への就学、就職のために益々共通語化の進んでいるのが現状である。この現状を反映して旧方言の言語体系を継承した新方言も共通語の影響を年々受けて変化しつつある。また、同様に旧方言自体も共通語化の影響を受けている。旧方言を使っている場合にも語彙の面では旧方言の語彙から共通語の語彙に使用語彙が変わりつつある。今回の調査でも老年の被調査者が本来の旧方言語彙を思い出すのに時間がかかった事でも分かる。音韻の面でも共通語化の影響を受けつつある。旧方言、新方言ともに世代が若くなるに従い益々共通語化の影響を受け、若年層では旧方言が使用できなくなっている。旧方言を失うのと反対に現代の若年

層では新方言と全国共通語の使い分けを行っているものもある。友人とくつろいだ場では新方言、学校等の公式的場ではできる限り共通語に近づけた言葉というように新方言と全国共通語の二言語併用になりつつあるのも現状である。今回の調査でも、他の言語体系、語彙、音韻、文法に比べ最も共通語化が遅れると言われているアクセントについても読むときには共通語のアクセント、実際に話すときには新方言のアクセントと使い分け意識のあるものもいた。このように、旧方言を継いだ新方言が全国共通語化の波に消えて行こうとしている様子を見せる一方、若い世代では旧方言を積極的に取り入れ新方言を発展させようとする様子も見れた。仲間意識の証としての新方言の役割であろう。近い将来第一期の話者のいなくなる時期が来るが、その折りに新方言はどのように変化するのだろうか。この時期が第四期となるのであろう。

## 2. 沖縄新方言の音韻

全国共通語と沖縄旧方言を対照言語学的な面から見ると以下の差異が目につく。

A. 母音の違い。旧方言でも地域によって大きく異なるが、共通語の母音との対応においてずれがある。那覇旧方言と対照すると、共通語のエがイに対応し、オがウに対応し、共通語5母音に対し旧方言3母音である。また、奄美方言のようにエが [i] に対応しておりイとの区別を保っている方言もあるが、基本的には共通語5母音に対して沖縄旧方言ア、イ、ウの3母音に対応する。しかし、エとオは母音の融合した結果長母音として現れ、音韻的には長母音としてエとオを持っていると考えられる。「里親」と「砂糖屋」というように音韻的対立を示す短母音と長母音をどのように音韻解釈<sup>\*12</sup>するかは問題のあるところではあるが、長母音/o:/を短母音/o/と音韻的に別個の音韻と考えないとすると、/oo/とか/o'o/のように長母音は短母音の繰り返しとも/oR/のように短母音プラス伸ばし音素とも考えられ旧方言においてもエとオは音韻的に存在していると考えられる。このように考えると、対照言語学的には旧方言ではともに/hune/になっている共通語の「骨」と「舟」を区別するに際し、「骨」の場合にはオに対応させ、「舟」の場合にはウに対応させるかという語彙の問題<sup>\*13</sup>に帰着する。共通語のエとオの音韻を新方言でうまく対応させているかは共通語化を考えるに当たっては大きな問題点である。他の地域と異なり、与那国方言においてはア、イ、ウの3母音しかなく母音の融合によって他の地域では生じたエとオが存在しない。従って、与那国においてはエとオを音韻的に新しく獲得しているかどうかが問題となる。

B. 声門閉鎖音による音韻的対立。奄美・沖縄旧方言では声門閉鎖音の有無によって、音/ʔutu/と夫/'utu/\*<sup>14</sup>というように共通語のエ以外のア行に対応する語には声門閉鎖音があり、共通語のエおよびワ行に対応する語には声門閉鎖音が無いというように音韻的対立<sup>\*15</sup>がある。しかし、共通語においても語頭の母音は声門閉鎖音で発音されるが音声的であって音韻的な対立はない。奄美・沖縄旧方言では音韻的対立のために喉頭化音がめだち、

新方言にも受け継がれている可能性がある。特に旧方言においてはア行のエもワ行のエも声門閉鎖音無しに発音されており、新方言で声門閉鎖音を伴って発音するようになるかは興味のある問題である。共通語化を考えるに当たり、単に音声レベルの問題ではなく、声門閉鎖音による音韻的な差性を失うかは大きな問題である。なお、与那国、八重山、宮古の先島旧方言では共通語のワ行音にバ行音が対応し声門閉鎖音による音韻的対立はみられない。

C. 有気非喉頭化音と無気喉頭化音の音韻的対立。沖縄諸方言において有気非喉頭化音と無気喉頭化音の対立は音韻体系の中で大きな位置を占めている。例えば、奄美方言では無声の破裂音と破擦音 [p・t・k・tʃ] に有気非喉頭化音と無気喉頭化音の音韻的対立がある。共通語のクとコは母音は [u] に統合しているが、有気非喉頭化音と無気喉頭化音の対立によって無気喉頭化音 [kʰu] \*<sup>16</sup>はクに有気非喉頭化音 [ku] はコに対応するというように音韻的な区別を保っている。沖縄本島方言には音韻的な対立はないが、異音として無気喉頭化音が聞かれる。与那国方言では [kʰun] 「聞く」のように /kik/、[kʰun] 「吹く」のように /huk/ に対応する形で無気喉頭化音が聞かれる。音声的には無気喉頭化のために喉に詰まって破裂する発音という聴覚的印象があり共通語の発音と違う感じがし、共通語化の中でこの音韻的対立をどの様に失うかという事は大きな問題点である。

D. 一拍語の長呼。奄美以外の沖縄全域に通じ一拍語は長呼される。全国共通語では短呼されるが、単に一拍の語が長く発音されるという語の問題ではなく、発音法上、音韻の問題に関わってくる問題でどの様になっているかは興味のある問題である。

E. 共通語アクセントの獲得。沖縄旧方言では九州方言に連なる二型アクセントもしくは無アクセントが主流である \*<sup>17</sup>。共通語を獲得するに当たり、単語のアクセントを旧方言からの類推で旧方言のアクセントを踏襲しているか、また共通語は外国語のように全く異なったアクセント体系を持つ言語というように旧方言からの類推無しに獲得しようとしているかは、興味のある問題である。共通語のアクセントの獲得については、本土各地では語彙、文法、音韻の面では共通語化が進み易いがアクセントの面では共通語化が遅れると言うようにアクセントについては在来方言のアクセントを踏襲し在来方言の影響が強く残るが、一方外国人が日本語を学習する際には母国語の影響無しにアクセントは最初から一つ一つ語毎に学習しなければならないというようにそれぞれ両極端に位置するが、沖縄でのアクセントの習得過程は在来方言から共通語のアクセントへの移行過程と外国人の日本語のアクセント学習過程の間にあると思われる。

今回は、沖縄旧方言の中で大区分されている奄美本島、奄美属島、沖縄本島、宮古本島、石垣本島、与那国島を対象に調査した。調査法として、共通語にある全ての音韻を含む単語表を見せて旧方言及び共通語ここで言う新方言で発音してもらった。次いでアクセント \*<sup>18</sup>については、以下に示す語について旧方言及び新方言で発音してもらった。語単独およびそ

それぞれの語に主格の助詞、旧方言については [nu]、新方言については [ga] のついた形を聞いた。

#### 二拍名詞

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1 類、鼻、風、腰、魚、 | 2 類、音、橋、川、人、  |
| 3 類、花、雲、年、   | 4 類、息、海、舟、今日、 |
| 5 類、雨、影、婿、桶、 |               |

#### 一拍名詞

- |            |          |
|------------|----------|
| 1 類、血、帆、   | 2 類、名、葉、 |
| 3 類、木、目、田、 |          |

旧方言の音韻及びアクセントが新方言にどの様に影響を及ぼしているか対照するために旧方言の発音も聞いた。

### 3. 奄美大島本島

奄美大島本島は地理的には鹿児島県に属し、本島及び南部瀬戸内町に属する加計呂麻島、請島、与路島によって構成される。人口約9万の島嶼であり、平地面積が少なく産業も盛んでなく現在では島外に出稼ぎにいくものが多く人口が減少している。言語的には、奄美大島本島方言は「沖縄語辞典」\*<sup>19</sup>によると琉球方言の中で奄美・沖縄方言群の下に属する方言である。更に、奄美大島本島方言は北部方言と南部方言に下位区分されている。調査は北部方言の代表地域として芦花部、小湊、南部方言の代表として加計呂麻島諸鈍で1991年3月に行った。被調査者として奄美大島芦花部にて、福山勇義（大正5年生まれ）盛東洋男（昭和18年生まれ）盛タツ子（昭和21年生まれ）有村伸二（昭和51年生まれ）、奄美大島小湊にて、昇恕庶（大正5年生まれ）、加計呂麻島諸鈍にて、昭山時男（明治38年生まれ）の諸氏に御協力いただいた。ここでは、老年の新方言の音韻を中心に、中年、若年の音韻で老年と違いがある場合には示す事にする。

#### 3.1 母音

新方言の音韻体系については北部方言と南部方言が同様になるので一まとめに示す事にする。北部と南部という地域差ではなく世代差が新方言の音韻体系に変化を及ぼしている。

旧方言においては、語頭ではア、イ、ウの三母音に統合しており、新方言においては、共通語同様ア、イ、ウ、エ、オになっている。オについては音韻としてウに統合しているが、布 [nono]、糸 [ʔito] のようにオの音が旧方言でも存在し、音韻的に代入する事は困難ではなかったと思われる。問題は /e/ が常に [je] と発音されることである。旧方言においては共通語のエやエに対応する音は「襟」[jeri]、「海老」[ʔibi]、「枝」[juda]、「絵」[ji:] のようになり、寺師忠夫氏\*<sup>20</sup>によると [ʔe] も驚いた時に発音する「えつ」で使われるとあるが言語音ではなく、旧方言に言語音として存在する [je] を新方言に代用したものであ

る。語頭のみではなく／e／は常に [je] と発音され、／se／も [sʲe] から [je] になる。しかし、若年の発音では [ʔe] を獲得している。ウが共通語のように平唇母音で発音されるが、旧方言でも寺師忠夫氏\*<sup>21</sup>の記述によると [ɯ] であり、旧方言の平唇性を継いで新方言でも平唇母音である。

また、旧方言では声門閉鎖音の有無によつて、音／ʔutu／と夫／'utu／という音韻的対立があり、新方言においても語頭の声門閉鎖音がめだつ。共通語においてはこの声門閉鎖音は音韻的には対立を持たないが、旧方言では対立があり、音韻的対立を示すため明確に発音され、この発音が音韻的対立を示さない共通語の発音にも受け継がれている。若年は旧方言の声門閉鎖音による音韻的対立を失っており、新方言の発音も声門閉鎖音がめだたない。新方言の音韻的体系の中で声門閉鎖音による示差性という重要な特徴が世代間で変化している。

新方言の発音で子音と結合した語中の母音においてエ段に問題は残るが、五母音が確立している。旧方言では大筋共通語のア段に [a]、イ段に [i]、ウ段に [ɯ]、エ段に [i]、オ段に [ɯ] が対応するが、新方言では5母音になっている。

「英語」「映画」のような連母音エイが長母音化して [e:] ならず [ei] と発音されている。また、「葬式」のオウも [ow] と発音されている。自身奄美出身で国語教師をしていた倉井則雄氏\*<sup>22</sup>によると、共通語において長音化するかしないかを教える事は国語教育の問題点であると説いてある。「相互」をソーゴと読む者が多いそうである。旧方言においてはエ段とオ段は常に長母音化しており新方言においてもエ段とオ段は長母音化する傾向にある事が分かる。反対に共通語で長母音化する「報道」をホドウと読む誤りもあると示されており、いつ長母音化していつ長母音化しないかは各語毎に覚えなければならず困難な問題である事が理解できる。文字をそのまま読むと共通語で長母音化している [e:] や [o:] も [ei] [ow] と読む新方言が現れてくる。

### 3.2 子音

奄美旧方言では有気非喉頭化音と無気喉頭化音とが [p·t·k·tʃ] の子音に音韻的対立を持つ。カ行を例にとると共通語のカに [ka]、キに [kʲi]、クに [kʲɯ]、ケに [ki]、コに [ku] が旧方言ではそれぞれ対応する。共通語のクとコは旧方言では有気非喉頭化音と無気喉頭化音によって音韻的に対立を示す。旧方言では音韻的対立はないが／ka／や／ko／も漢語や促音の後では [kʲa] や [kʲo] となり、拗音では常に無気喉頭化する。外来者として移入されたパ行音もパン [pʲan]、ピン [pʲin]、プール [pʲɯ:nɯ]、ペン [pʲen]、ポマード [pʲoma:do] と発音されている。有標、無標という概念を導入すれば無気喉頭化音が無標で、有気非喉頭化音が有標のように思われる。老年と中年の発音には新方言においても無気喉頭化音が使われ、喉に詰まった音がめだつ。旧方言の発音を新方言にも受け継いでいる。新方言の／ku／は常に無気喉頭化しており、共通語のコに対応する [ku] を代入したのではなく、共通語のクに対応する旧方言の [kʲɯ] を使っている。そして、話者自身は

共通語でも共通語のクは無気喉頭化していると思っている。しかし、若年の発音には無気喉頭化音はでない。若年は旧方言の保持という観点からみれば、もう正確な有気非喉頭化音と無気喉頭化音の音韻的区別に困難を感じるようになってきている。

サ行のセの [e] が [je] に発音される事から新方言では [je] と発音される。同様にザ行のゼも [dʒe] と発音されている。

タ行のチとツが旧方言では [tʃʰi] に統合されて区別を失って、共通語のタが [ta]、チが [tʃʰi]、ツが [tʃʰi]、テが [tɪ]、トが [tu] に対応している。新方言ではチとツは [tʃʰi] [tu] で区別している。ツが共通語のように [tsu] にならず、トに対応する [tu] で代用している。しかし、若年の発音では [tsu] を獲得している。同様に旧方言ではザ行音のズとダ行音のヂが [dʒi] となり、新方言ではドに対応する [du] で代用している。

旧方言ではワ行音でワが [wa]、ヰが [ji]、ヲが [wu] と共通語には消滅した音韻が声門閉鎖音の有無でア行と区別を残している。新方言においてもイは [ʰi]、ヰは [ji]、オは [ʰo]、ヲは [wo] と区別している。例えば、「居る」は [ʰiru] でなく [jiru] で区別を残している理由として、一つに歴史仮名遣いの影響が考えられる。戦前の学校教育を受けた人々は旧方言でワ行音とア行音の区別があり、歴史仮名遣いで書き分けられているので文字の影響でその区別を保った可能性がある。また、旧方言でワ行音がア行音と音韻的体系の区別があるので旧方言ではある語はワ行音で発音されているので新方言でもワ行音でというように旧方言音韻からの類推によって新方言でも区別を保った可能性もある。老年は明確な区別を残すが、中年はゆれており、また、若年はその区別を失い共通語と同様になっている。

ガ行音は旧方言の影響を受け継ぎ鼻音化しない。

漢字音から引き継いだ旧方言の音韻 /kwa/ を無気喉頭化した [kʰwa] という発音で保持している。

### 3.3 アクセント

二拍名詞については、芦花部旧方言では 1・2・3・5 類が ○●、○○▶、4 類が ●○、●○▷ になる。小湊旧方言では、1・2・3 類では ○●、○○▶、4 類で ●○、●○▷、5 類で 雨が ○●、○○▶ となるのに対し、影、婿、桶が ●○、●○▷ となっており語によって 4 類と統合している。諸鈍旧方言では 1 類の鼻、風が ○●、○●▷、腰、魚が ●○、●●▷、2 類の音が ○●、○●▷、橋、川、人が ●○、●●▷、3・4・5 類が ○●、○●▶ となる。新方言では芦花部、小湊共に旧方言でアクセントの区別を残し 1・2・3 類が ○●、○○▶、4・5 類が ●○、●○▷ となり、新方言でも旧方言のアクセントを引き継いでいる。芦花部では老・中・若年全てに調査を行ったが全て同じアクセントを持ちアクセントは安定している。語形で旧方言と類推のつく語に関しては新方言においても旧方言のアクセントを受け継いでいる。諸鈍新方言では旧方言では共通語アクセントと大きく異なり、また共通語にない上昇調アクセントを持ち、旧方言との類推が効かず ○●、○●▷ に統合している。



一拍名詞については、芦花部、小湊旧方言で1・2・3類が○、○▶に総合しており、新方言のアクセントは1・2・3類とも●、●▶になる傾向が強いが二拍名詞のように安定していない。諸鈍旧方言では一拍語は長呼され1・2類は●○、●●▶、3類は○●、○○▶となる。新方言においては長呼がなく1・2・3類とも●、●▶になる傾向がある。

### 3.4 新方言の音節表

新方言の音節表を共通語と対応して示す事にする。第一期の話者の新方言を中心に示す事にする\*<sup>23</sup>。

/a/[ʔa]	/i/[ʔi]	/u/[ʔu]	/e/[je]	/o/[ʔo]
/ka/[ka]~[kʔa]	/ki/[kʔi]	/ku/[kʔu]	/ke/[kʲe]	/ko/[ko]~[kʔo]
/sa/[sa]	/si/[ʃi]	/su/[su]	/se/[ʃe]	/so/[so]
/ta/[ta]~[tʔa]	/ti/[tʔʃi]	/tu/[tu]	/te/[tʲe]	/to/[to]~[tʔo]
/na/[na]	/ni/[ɲi]	/nu/[nu]	/ne/[ɲe]	/no/[no]
/ha/[ha]	/hi/[çi]	/hu/[Φu]	/he/[hʲe]	/ho/[ho]
/ma/[ma]	/mi/[mi]	/mu/[mu]	/me/[mʲe]	/mo/[mo]
/ja/[ja]		/ju/[ju]		/jo/[jo]
/ra/[ra]	/ri/[ri]	/ru/[ru]	/re/[rʲe]	/ro/[ro]
/wa/[wa]	/wi/[ji]			/wo/[wo]
/ga/[ga]	/gi/[gi]	/gu/[gu]	/ge/[gʲe]	/go/[go]
/za/[dza]	/zi/[dʒi]	/zu/[du]	/ze/[dʒe]	/zo/[dzo]
/da/[da]			/de/[dʲe]	/do/[do]
/ba/[ba]	/bi/[bi]	/bu/[bu]	/be/[bʲe]	/bo/[bo]
/pa/[pʔa]	/pi/[pʔi]	/pu/[pʔu]	/pe/[pʲe]	/po/[pʔo]
/kja/[kʔja]		/kju/[kʔju]		/kjo/[kʔjo]
/sja/[ʃa]		/sjü/[ʃu]		/sjo/[ʃo]
/tja/[tʔʃa]		/tju/[tʔʃu]		/tjo/[tʔʃo]
/nja/[nja]		/nju/[ɲju]		/njo/[ɲjo]
/hja/[çja]		/hju/[çju]		/hjo/[çjo]
/mja/[mja]		/mju/[mjü]		/mjo/[mjjo]
/rya/[rja]		/rju/[rju]		/rjo/[rjo]
/gja/[gja]		/gju/[gjü]		/gjo/[gjjo]
/zja/[dʒa]		/zju/[dʒü]		/zjo/[dʒjo]
/bja/[bja]		/bju/[bjü]		/bjo/[bjjo]
/pja/[pʔja]		/pju/[pʔjü]		/pjo/[pʔjo]
/kwa/[kʔwa]				

共通語と比較をすればいくつかの違いが見つげだされるが、無気喉頭化音、ワ行音、エ音の違いに気づく。～はゆれる事を示している。

#### 4. 沖永良部島

沖永良部島は鹿児島県下にある奄美本島と沖縄本島の間に位置する面積93.6km<sup>2</sup>、人口1万6千人の島である。方言的には「沖縄語辞典」\*<sup>24</sup>によると奄美・沖縄方言群の下位区分沖永良部島方言に属する。沖永良部島方言は東部と西部に更に下位区分されるが、調査は西部の知名町上平川と住吉で1991年3月に行った。調査に御協力いただいた方々は下記の通りである。上平川では神川窪栄（大正5年生まれ）、木下西村（大正7年生まれ）、武原吉彦（昭和28年生まれ）、芦村ゆみ子（昭和42年生まれ）、住吉では豊島ウト（明治39年生まれ）、島清ハナ（明治39年生まれ）、豊山ヨシ（大正3年生まれ）、川南ハル（大正4年生まれ）、原ハナ（大正4年生まれ）、平良清義（大正6年生まれ）、中山中間（大正7年生まれ）の諸氏である。共通語との接触を考えるのにこの島は本土との接触が大きいという事実を考慮すべき事情にある。島には産業がなく本土との連絡船の終着港、神戸・大阪にほとんどのものが出稼ぎに行った経験を持っているという事である。現在では、島の人口の3倍以上の人口が神戸・大阪に定住している。老年層の話す共通語は関西方言の影響を多く受けており、出稼ぎ先の関西で習得したものと思われる。また、戦後米軍の統治下におかれたが昭和28年の復帰以降、昭和40年ぐらいからのテレビの普及で急速に共通語化が進んでいる。30才ぐらいを境に旧方言を話すことのできない世代が育ちつつあるがテレビの影響と思われる。

##### 4.1 母音

旧方言ではア、イ、ウを基調にする3母音が共通語の5母音に対応するが、新方言ではア、イ、ウ、エ、オになっている。旧方言においても「前」が [me]、「竿」が [so:] となり、連母音のアエが [e]、アオが [o:] と変化した母音 [e] [o] がある事から新方言においても5母音を使い分けている。ただし、語頭の /e/ は [je] と発音されている。語頭でなくても「前」は [ma<sup>i</sup>e] と発音される。老年層では [i<sup>e</sup>] の影響で /se/ が [s<sup>i</sup>e] から [j<sup>e</sup>]、/ze/ が [d<sup>i</sup>e] から [d<sup>ʒ</sup>e] に発音される。各段に渡り /e/ の母音が [i<sup>e</sup>] となることから、「骨」[hope]、「雨」[ʔam<sup>i</sup>e] のようになる。しかし、中年からは共通語同様 [ʔe] となっている。

この地域においても、旧方言で声門閉鎖音の有無が「音」/ʔutu/「夫」/ʔutu/のように音韻的対立を示す標識になっている事から、新方言においても「夫」[wotto]、「踊り」[wodoru]、「居る」[jiru]、「緒」[wo] と発音され、新方言でも声門閉鎖音の有無によって音韻的対立を保っている。中年ではこの音韻的対立にゆれがみられ、若年では音韻的対立を失い共通語と同じになっている。また、若年では旧方言を話そうとするおりに [ji] [wu] が発音できず声門閉鎖音による音韻的対立を持っていない。

連母音「英語」「映画」のエイが [ei]、「葬式」のオウが [ou] と発音され長母音化しないが文字からの影響であろうか。

## 4.2 子音

沖永良部島旧方言では奄美本島旧方言のように有気非喉頭化音と無気喉頭化音は音韻的対立を示さない。例えば、カ行では共通語のカに [ha] や [ka]、キに [ki]、クに [ku] や [kʰu]、ケに [ki] や [çi]、コに [Φu] や [ku] や [kʰu] が対応し、タ行ではタに [ta]、チに [tʃi] や [tʰʃi]、ツに [tʃi] や [tʰʃi]、テに [ti]、トに [tu] が対応する。共通語のクに対応するのは旧方言では [ku] や [kʰu] で、無気喉頭化音が聞かれることがあるが音韻的には対立していない。新方言の発音でも有気非喉頭化音と無気喉頭化音は異音としてでてくるだけである。しかし、旧方言に外来音として導入されたパ行音には常に喉頭化音が使われている。従って、新方言にも喉頭化音が使われている。この傾向は中年の発音にまで受け継がれているが、若年の発音にはカ行、タ行、パ行いずれにも喉頭化音は現れない。調音法も若年においては旧方言の調音法を受け継がず、共通語と同様になっている。

サ行のセの [e] が [ɛ] に発音される事から新方言では [ʃe] と発音される。同様にザ行のゼが [dʒe] と発音されるが、中年からは [se] [dze] になっている。若年のインフォーマントは小学校時代にセを [ʃe] と発音した学童もいて皆で矯正した事実を報告した。

タ行のチとツが旧方言では [tʃʰi] と [tʃi] に統合されて区別を失っているが、新方言ではチは [tʃʰi] や [tʃi]、ツは [tsu] で区別している。しかし、老年の発音ではツが [tsu] にならず、[tu] になることがしばしばある。若年の発音では [tsu] を獲得している。

旧方言ではワ行音でワが [wa]、ヰが [ji]、ヱが [ji]、ヲが [wu] と共通語には消滅した音韻が声門閉鎖音の有無でア行と区別を残している。新方言においてもイは [ʰi]、ヰは [ji]、オは [ʰo]、ヲは [wo] と区別している。例えば、「居る」は [ʰiru] でなく [ji ru] で、「緒」は [ʰo] でなく [wo] で発音し、旧方言の区別を継承している。しかし、若年では旧方言の区別を失っている。

ガ行音は旧方言の影響を受け継ぎ鼻音化しない。

漢字音から引き継いだ旧方言の音韻 /kwa/ を新方言でも保持している。しかし、中年からは旧方言を使うときには /kwa/ を使うが新方言の音韻としては失っている。

旧方言において一拍語は長呼するが、新方言ではその傾向はない。

## 4.3 アクセント

下平川旧方言においては二拍名詞は 1・2 類は ●●、●●▶、3 類と 5 類の「雨」は ○●、○○▶、4 類と「雨」の他の 5 類は ○●、○●▷となる。新方言においても旧方言の類推から同様のアクセントを保持している。一拍名詞は旧方言では長呼されて発音される。1、2 類は ●●、●●▶、3 類は ○●、○○▶となる\*<sup>25</sup>。新方言においても語の類推から旧方言のアクセントを継承している。以上が老年層のアクセント体系であるが、若年は老年層から

引き継いだ新方言のアクセントとテレビの影響と思われる共通語のアクセントを使い分けている。しかし、新方言のアクセントも旧方言の類推が効かないときは二拍語は○●、○●▷、一拍語は●、●▷になる可能性が強く無アクセント化の様相を示す。調査時アクセントが共通語と同様になるので聞きただしたところ本を読むときのアクセントと普段のアクセントを使い分けようとしているとの事であった。名古屋在住二年間の経歴のある若年の被調査者は自身の名前「ゆみ子」も島の外で島出身者以外には●○○、島の友人間では○●○と明確な区別意識がある。若年ではテレビの影響が大きく、音韻に関しては共通語と何等変わるところがないが唯一共通語と異なるアクセントに関しても使い分けようとしているところにテレビによる共通語の影響の大きさを感じた次第である。

#### 4.4 新方言の音節表

新方言の音節表を共通語と対応して示す事にする\*<sup>26</sup>。第一期の話者の新方言を中心に示す事にする。

/a/[ʔa]	/i/[ʔi]	/u/[ʔu]	/e/[je]	/o/[ʔo]
/ka/[ka]~[kʔa]	/ki/[kʔi]~[ki]	/ku/[kʔu]~[ku]	/ke/[kʔe]	/ko/[ko]~[kʔo]
/sa/[sa]	/si/[ʃi]	/su/[su]	/se/[ʃe]	/so/[so]
/ta/[ta]~[tʔa]	/ti/[tʔʃi]	/tu/[tu]~[tsu]	/te/[tʔe]	/to/[to]~[tʔo]
	~[tʃi]			
/na/[na]	/ni/[ɲi]	/nu/[nu]	/ne/[ɲe]	/no/[no]
/ha/[ha]	/hi/[çi]	/hu/[Φu]	/he/[hʔe]	/ho/[ho]
/ma/[ma]	/mi/[mi]	/mu/[mu]	/me/[mʔe]	/mo/[mo]
/ja/[ja]		/ju/[ju]		/jo/[jo]
/ra/[ra]	/ri/[ri]	/ru/[ru]	/re/[rʔe]	/ro/[ro]
/wa/[wa]	/wi/[ji]			/wo/[wo]
/ga/[ga]	/gi/[gi]	/gu/[gu]	/ge/[gʔe]	/go/[go]
/za/[dza]	/zi/[dʒi]	/zu/[du]~[dzu]	/ze/[dʒe]	/zo/[dzo]
/da/[da]			/de/[dʔe]	/do/[do]
/ba/[ba]	/bi/[bi]	/bu/[bu]	/be/[bʔe]	/bo/[bo]
/pa/[pʔa]	/pi/[pʔi]	/pu/[pʔu]	/pe/[pʔe]	/po/[pʔo]
/kja/[kʔja]~[kja]		/kju/[kʔju]~[kju]		/kjo/[kʔjo]~[kjo]
/sja/[ʃa]		/sju/[ʃu]		/sjo/[ʃo]
/tja/[tʔʃa]~[tʃa]		/tju/[tʔʃu]~[tʃu]		/tjo/[tʔʃo]~[tʃo]
/nja/[nja]		/nju/[nju]		/njo/[njo]
/hja/[çja]		/hju/[çju]		/hjo/[çjo]
/mja/[mja]		/mju/[mju]		/mjo/[mjo]

/rya/[rja]	/rju/[rju]	/rjo/[rjo]
/gja/[gja]	/gju/[gju]	/gjo/[gjo]
/zja/[dʒa]	/zju/[dʒu]	/zjo/[dʒo]
/bja/[bja]	/bjju/[bjju]	/bjjo/[bjjo]
/pja/[pʔja]~[pja]	/pjju/[pʔju]~[pju]	/pjjo/[pʔjo]~[pjo]
/kwa/[kwa]		

無気喉頭化音はパ行以外～で示しているが、これは新方言の発音において旧方言同様自由変異で起こる事を示している。

## 5. 沖縄本島

今回の調査は1991年3月に那覇市の首里と那覇において行った。那覇と首里で使われている旧方言は「沖縄語辞典」\*<sup>27</sup>では、奄美・沖縄方言群の中の沖縄南部方言に属する方言である。那覇市は沖縄県の県庁所在地であり、沖縄県全体の中でまさに中心地であり、沖縄県内の離島からの移入者が多く、また、日本本土との交流の中心地である。共通語化を考えるのに当たっても沖縄県各地からそれぞれ異なる旧方言話者が入り交じり新方言が共通語として、また、本土との交流の中心地であるという事から全国共通語が導入される度合いが沖縄県の他の地域に比べて大きいと思われる。かつては、那覇で使われていた旧方言が沖縄県内において共通語の地位を占めていたといわれているが現在では各島によって異なるそれぞれの新方言がその位置を占めている。また、沖縄県内の若年層が那覇で生活したり、那覇の若年層が沖縄の他の地域に生活する機会が多く那覇の新方言が他の沖縄地域に及ぼす影響も無視できない。1991年の夏の調査の折、たまたま選抜高等学校の決勝戦に沖縄代表の学校が残り、その時の盛り上がりの様子を経験したが、沖縄代表校は単に日本の一県の代表ではなく本土に対する沖縄の代表という意識が感じられ、言語面においても旧方言の消滅しようとしている現状で新方言を沖縄の地域意識の象徴としようという勢力が感じられた。全国共通語化の進む中で那覇新方言が地域意識の中心となり生き残るかは大きな問題と考えられる。調査に御協力いただいたのは首里では宮里朝光（大正13年生まれ）、那覇では仲地静子（明治42年生まれ）、友寄景孝（昭和13年生まれ）、友寄景元（昭和46年生まれ）の諸氏である。なお、宮里氏は士族の出身であるが、音韻的には士族と平民の間に存在するといわれている旧方言の音韻の差がほとんど認められず、那覇の旧方言の音韻で代表させる事にする。

### 5.1 母音

那覇旧方言においては共通語5母音に対応するのは3母音である。共通語のイとエが旧方言ではイに、ウとオがウに対応している。しかし、新方言では5母音になっている。旧方言においてはエは「前」[me:]、「蠅」[Φe:]のようにアエから変化した長母音、「太鼓」[teku]、「灰」[Φe:]のようにアイから変化した長母音として、また、オは「竿」[so:]、

「青い」[ʔo:saŋ] のようにアオから変化した長母音として使われている。数は少ないが、短いエやオも促音や撥音の前では擬声語や中国語からの借用語として使われており、新方言においても5母音を使い分ける事は困難ではなかったと思われる。しかし、語頭のエは「枝」[jeda]、「襟」[jeri] のように [je] と発音されている。語頭でなくても「前」、「上」のように語中に現れるエも [maʔe]、[ʔuʔe] と発音されている。この発音の傾向は中年まで継続され、若年になると [ʔe] になっている。これは旧方言において共通語のエやエに対応する音韻は声門閉鎖音を伴わずに発音されるという旧方言の音韻体系を継承したものである。ウが共通語のように平唇母音ではなく、旧方言の円唇性を継いで新方言でも円唇母音である。

那覇旧方言においては声門閉鎖音による音韻的対立が「犬」/ʔin/、「緑」/ʔin/ のように存在しており声門閉鎖音の有無が重要な音韻的指標となっている。新方言においても中年までは「夫」[wotto]、「踊り」[wodori]、「居る」[jiru]、「緒」[wo] のように発音しており、新方言においても声門閉鎖音による音韻的対立を保っている。若年にはこの音韻的対立はない。

連母音のエイが共通語の [e:] でなく新方言では [ei] と発音されている。

一拍語は旧方言では長呼され老年は新方言においても長呼する習慣を保っている。

## 5.2 子音

サ行音は旧方言では共通語のサが [sa]、シが [ʃi]、スが [ʃi]、セが [ʃi]、ソが [su] に対応している。新方言では5母音になっているがセが [ʃe] と発音されている。「沖縄語辞典」\*<sup>28</sup>によると、旧方言でもセの子音は人または語によって [s] になったり [ʃ] になったりするそうである。ザ行音においてもゼが「風」が [kadʒe] のように [dʒe] で発音される。エの音が [je] となることからの影響である。また、金城朝永氏\*<sup>29</sup>によると、那覇旧方言では「書物」[sumuʃi]、「免職」[migsuku] のように共通語のショが旧方言ではシェになるが拗音の発音がなくスに変わり、シャも「写真」[saʃin]、「汽車」[kisa] と発音している。サ行においては那覇旧方言では拗音と直音の区別が音韻的に存在しない事からそれぞれ「写真」[saʃin]、「趣味」[sumi] と発音している。語彙的に「正月」は [ʃogwatsu] と発音されショを音韻的に持っている。しかし、シャとシェも中年からは獲得している。首里旧方言では平民は那覇旧方言と同じであるが、士族は直音と拗音の区別を音韻的に持っている。

タ行に関しては旧方言では全国共通語のタは [ta]、チとツとテは [tʃi]、トは [tu] が対応するが、ツが [tsu] ではなく [tu] と発音される事がある。同様にザ行のズが [du] となることも観察された。

ナ行音ではネが [ne] のように発音される。エが [ʔe] と発音される事からきているが、旧方言においても共通語のニとネに対応するニが [ni] のように口蓋化している事も影響しているのであろうか。そのほかエ段は口蓋化して発音される傾向が強い。

旧方言ではワ行音でワが [wa]、キが [ji]、エが [ji]、ヲが [wu] と共通語には消滅した音韻が声門閉鎖音の有無でア行と区別を残している。新方言においてもイは [ʔi]、キは [ji]、オは [ʔo]、ヲは [wo] と区別している。例えば、「居る」は [ʔiru] でなく [jiru] で、「緒」は [ʔo] でなく [wo] で発音し、旧方言の区別を継承している。

ガ行音は旧方言の影響を受け継ぎ鼻音化しない。

漢字音から引き継いだ旧方言の音韻 /kwa/ を新方言でも保持している。しかし、中年からは新方言の音韻としては失っている。

旧方言では無気喉頭化音と有気非喉頭化音が音韻的には対立しないが外来者のパ行音に「パン」[pʰan]、「ピン」[pʰin]、「プール」[pʰu:ru]、「ペン」[pʰen]、「ポマード」[pʰoma:do] のように無気喉頭化音が現れる。新方言においても老年はこの習慣を継続している。カ行等には無気喉頭化音が現れる事があるが、聞き返すと有気非喉頭化音になり、あくまでも異音としてしかでてこない。

### 5.3 アクセント

首里旧方言においては二拍語は 1・2 類は ●○、●●▷ のように下降型、3・4・5 類は中程度の高さの続く平板型で発音される。新方言のアクセントは無アクセントになっている。傾向として平板型になるか、○●、○●▷ のようになる。また、那覇旧方言では語単独では全て中程度の高さの続く平板型で、助詞 /nu/ が付くと 1・2 類は中程度の高さの続く平板型で、3 類は ○○▶ になり、4・5 類は ●○▷ になる。新方言においては老年は旧方言のアクセントを継承し、中年になると無アクセントになる。老年は新方言を使うに当たっても旧方言から類推して旧方言のアクセントを継承しているが、中年になると新方言のアクセントは旧方言からの類推ができなくなり無アクセントになったと考えて良いと思われる。若年は無アクセントである。しかし、若年は学校教育のため全国共通語のアクセントと新方言のアクセントは異なる事を理解しており、本を読む時や畏まった場合には共通語のアクセントに同化しようとする傾向が感じられる<sup>\*30</sup>。

### 5.4 新方言の音節表

新方言の音節表を共通語と対応して示す事にする<sup>\*31</sup>。第一期の話者の新方言を中心に示す事にする。

/a/[ʔa]	/i/[ʔi]	/u/[ʔu]	/e/[je]	/o/[ʔo]
/ka/[ka]	/ki/[ki]	/ku/[ku]	/ke/[k'e]	/ko/[ko]
/sa/[sa]	/si/[ʃi]	/su/[su]	/se/[ʃe]	/so/[so]
/ta/[ta]	/ti/[tʃi]	/tu/[tu]	/te/[t'e]	/to/[to]
		~[tsu]		
/na/[na]	/ni/[ɲi]	/nu/[nu]	/ne/[ɲe]	/no/[no]
/ha/[ha]	/hi/[çi]	/hu/[Φu]	/he/[h'e]	/ho/[ho]

/ma/[ma]	/mi/[mi]	/mu/[mu]	/me/[m <sup>h</sup> e]	/mo/[mo]
/ja/[ja]		/ju/[ju]		/jo/[jo]
/ra/[ra]	/ri/[ri]	/ru/[ru]	/re/[r <sup>h</sup> e]	/ro/[ro]
/wa/[wa]	/wi/[ji]			/wo/[wo]
/ga/[ga]	/gi/[gi]	/gu/[gu]	/ge/[g <sup>h</sup> e]	/go/[go]
/za/[dza]	/zi/[dʒi]	/zu/[du]	/ze/[dʒe]	/zo/[dzo]
		~[dzu]		
/da/[da]			/de/[d <sup>h</sup> e]	/do/[do]
/ba/[ba]	/bi/[bi]	/bu/[bu]	/be/[b <sup>h</sup> e]	/bo/[bo]
/pa/[p <sup>h</sup> a]	/pi/[p <sup>h</sup> i]	/pu/[p <sup>h</sup> u]	/pe/[p <sup>h</sup> e]	/po/[p <sup>h</sup> o]
/kja/[kja]		/kju/[kju]		/kjo/[kjo]
				/sjo/[ʃo]
/tja/[tʃa]		/tju/[tʃu]		/tjo/[tʃo]
/nja/[nja]		/nju/[nju]		/njo/[njo]
/hja/[çja]		/hju/[çju]		/hjo/[çjo]
/mja/[mja]		/mju/[mju]		/mjo/[mjo]
/rya/[rja]		/rju/[rju]		/rjo/[rjo]
/gja/[gja]		/gju/[gju]		/gjo/[gjo]
/zja/[dʒa]		/zju/[dʒu]		/zjo/[dʒo]
/bja/[bja]		/bju/[bju]		/bjo/[bjo]
/pja/[pja]		/pju/[pju]		/pjo/[pjo]
/kwa/[kwa]				

～はゆれのある事を示している。

## 6. 宮古島平良

調査は1991年8月に行った。宮古島は先島の中でも島内産業が発達しておらず、最近ではトライアスロンの開催地で有名であるが観光産業の面でも宮古島を通り過ぎて同じ先島の石垣に観光客が行くという関係で、沖縄本島や石垣島等の島外へ移出している者は多いが、移入者が少なく外部からの影響を受ける事が少ない。旧方言は「沖縄語辞典」\*<sup>32</sup>によると、先島方言群の中の宮古本島方言に属する。同じ先島の中でも八重山方言とは相互理解が不可能で、まして沖縄本島方言とは大きく異なる。調査には友利玄純（明治40年生まれ）、末広芳一（明治40年生まれ）、佐渡山正吉（昭和2年生まれ）、砂川幸夫（昭和16年生まれ）、奥山幸子（昭和16年生まれ）、下地ひろ子（昭和30年生まれ）、久貝義朝（昭和50年生まれ）の諸氏に御協力頂いた。移入者が少ないという事から他の地域に比べて比較的旧方言が保持され



ており、新方言の発達が遅れている。昭和50年生まれの子供も音韻的には旧方言を完全に保持しており、家庭内でも老年層が同居しているところでは若年層でも老年層の旧方言を理解できる者が多い事が想像される。

### 6.1 母音

宮古旧方言では全国共通語のに対応するのは、共通語のアにはア、イには中舌母音の [i] で、ウにはウ、エにはイ、オにはウと4母音で対応している。旧方言でも [je:] 「応答・はい」や [bo:] 「棒」のように長母音でエやオがあり、新方言においても5母音を獲得している。しかし、[jeda] 「枝」、[je ri] 「襟」のように語頭においても、[ʔu'e] 「上」、[ma'e] 「前」のように語中においてもエは [je] と発音されている。若年層では全国共通語のように [ʔe] で発音する。また、ウの音が旧方言では円唇性を持つ母音で新方言においても老年層から若年層に到るまで円唇性を保っている。イの音が旧方言では中舌母音の [i] で発音される事から老年層では新方言の発音でも中舌母音になる事がしばしば観察された。旧方言においては中舌母音 [i] は前に子音が無いときには [tuʔi] 「鳥」、有声子音の後では [fugʔi] のように摩擦音を伴うが新方言では音韻的に中舌母音が使われる事がなく摩擦音は聞かれない。また、旧方言においては一拍語は [ʔi:] 「胃」、[ki:] 「木」のように長呼される。新方言の発音においても老年層は長呼を保っているが、中年層及び若年層では長呼と短呼でゆれる。共通語のエイが [e:] とならず、[ei] と発音される。

### 6.2 子音

サ行音は旧方言では共通語のサが [sa]、シ、スが [sɪ]、セが [ʃi]、ソが [su] に対応している。新方言では5母音になっているが老年層ではセが [je] と発音されている。同様にゼも [dʒe] と発音される。中年、若年では全国共通語同様に [dze] と発音する。また、スが旧方言の影響で [sɪ] と発音される事がある。老年層では、サ [sa]、シ [ʃi]、ス [sɪ] ~ [su]、セ [je]、ソ [so] となる。同様にタ行音もツが [tsɪ] と [tsu] でゆれることがある。ハ行音では旧方言で、ハ [pa]、ヒ [pɪ]、フ [fu]、ヘ [pi]、ホ [pu] とフが唇歯音になり5母音の区別を残しているが、新方言にもフは全国共通語の [ɸu] ではなく [fu] と発音している。外来音のファ、フィ、フェ、フォも [fa]、[fi]、[fe]、[fo] と [f] 音で発音している。旧方言では [maffa] 「枕」、[ffu] 「黒」のように [f] 音があり、新方言の発音にも旧方言の発音を移入したものだ。「菓子」は旧方言では [ko:ʃi] というが新方言では [kwafɪ] といい、共通語教育の際に取り入れた音韻であろうか／kwa／という音韻が存在する。

### 6.3 アクセント

平良市の旧方言のアクセントについては上村幸雄氏\*<sup>33</sup>によると一型アクセントであり、平山輝男氏\*<sup>34</sup>によると崩壊一型アクセントに近づいてはいるが尾高型の統合一型アクセントである。筆者の観察するところでは尾高型の一型アクセントに聞こえる。全ての語が○●、

○○►のように、語単独で読んだ場合には「花」も「鼻」も○●のように、助詞がつくと○  
○►のようになる。新方言のアクセントにおいても同様であり、全ての語が全世代を通じて  
○●、○○►の様に発音され、全国共通語のアクセントは習得していない。若年層に対し学  
校教育でアクセントの区別を学習していたかを尋ねたが、アクセントの区別のある事にも気  
づいていなかった。本来の旧方言のアクセントが一型アクセントであるので、共通語のアク  
セントを習得するのにも型知覚の意識が働かないためであろう。

#### 6.4 新方言の音節表

新方言の音節表を共通語と対応して示す事にする。第一期の話者の新方言を中心に示す事  
にする。

/a/[ʔa]	/i/[ʔi]	/u/[ʔu]	/e/[je]	/o/[ʔo]
/ka/[ka]	/ki/[ki]	/ku/[ku]	/ke/[kʰe]	/ko/[ko]
/sa/[sa]	/si/[ʃi]	/su/[su]	/se/[ʃe]	/so/[so]
		~[sī]		
/ta/[ta]	/ti/[tʃi]	/tu/[tsu]	/te/[tʰe]	/to/[to]
		~[tsi]		
/na/[na]	/ni/[ɲi]	/nu/[nu]	/ne/[ɲe]	/no/[no]
/ha/[ha]	/hi/[çi]	/hu/[fu]	/he/[hʰe]	/ho/[ho]
/ma/[ma]	/mi/[mi]	/mu/[mu]	/me/[mʰe]	/mo/[mo]
/ja/[ja]		/ju/[ju]		/jo/[jo]
/ra/[ra]	/ri/[ri]	/ru/[ru]	/re/[rʰe]	/ro/[ro]
/wa/[wa]				
/ga/[ga]	/gi/[gi]	/gu/[gu]	/ge/[gʰe]	/go/[go]
/za/[dza]	/zi/[dʒi]	/zu/[dzu]	/ze/[dʒe]	/zo/[dzo]
/da/[da]			/de/[dʰe]	/do/[do]
/ba/[ba]	/bi/[bi]	/bu/[bu]	/be/[bʰe]	/bo/[bo]
/pa/[pa]	/pi/[pi]	/pu/[pu]	/pe/[pʰe]	/po/[po]
/fa/[fa]	/fi/[fi]		/fe/[fʰe]	/fo/[fo]
/kja/[kja]		/kju/[kju]		/kjo/[kjo]
/sja/[ʃa]		/sju/[ʃu]		/sjo/[ʃo]
/tja/[tʃa]		/tju/[tʃu]		/tjo/[tʃo]
/nja/[nja]		/nju/[nju]		/njo/[njo]
/hja/[çja]		/hju/[çju]		/hjo/[çjo]
/mja/[mja]		/mju/[mju]		/mjo/[mjo]
/rya/[rja]		/rju/[rju]		/rjo/[rjo]

/gja/[gja]	/gju/[gju]	/gio/[gio]
/zja/[dʒa]	/zju/[dʒu]	/zjo/[dʒo]
/bja/[bja]	/bju/[bju]	/bjo/[bjo]
/pja/[pja]	/pju/[pju]	/pjo/[pjo]
/kwa/[kwa]		

～はゆれのある事を示している。

## 7. 石垣島石垣市

石垣市は八重山群島の中心地になっている。八重山群島は石垣島を中心に鳩間島、黒島、竹富島、波照間島、新城島、小浜島、西表島等の離島で構成されている。石垣市には、石垣市の役所だけでなく離島の町役場である竹富町役場が有り行政の中心地であるだけではなく、高等学校が有り教育の中心地にも、観光や産業の中心地にもなっている。従って、離島からより安定した生活を求めて移入してきた人々によって人口構成がなされている。ここに示す新方言は先祖代々石垣市に住んでいる人々の言語で代表する事にする。離島に及ぼす石垣市の新方言の役割も軽視できない。八重山群島の地域共通語としての役割を石垣新方言は果たすようになってきているように感じられる。即ち、八重山群島には高等学校は石垣市にしか無く、働き口も石垣市では見つけられるので離島の若者が教育、就業の目的で集まり、石垣新方言を習得し各離島に持ち込んでいる。また、若者の間では老年層の使う旧方言と異なる旧方言語彙を取り入れた新方言を発達させつつあり仲間うちの言語として使っている。石垣旧方言は「沖縄語辞典」\*<sup>35</sup>によると、先島方言群の中の八重山方言群に下位分類されている。今回の調査でたまたま「シマムニ大会」を見る機会に恵まれた。シマムニとは島言葉という意味で失われつつある旧方言を復活しようという意図で青年団が方言の演芸会を催したものである。伝統演芸は旧方言で、新作演芸は新方言でなされていた。会場の雰囲気は盛況であったが伝統演芸を理解できるものは老年層だけであったようである。このような会が催されるとい事自体旧方言消滅の危機を感じているという事実を裏付けるものであろう。また、「八重山の方言を学ぶ会」という同好会があり、勉強会を月毎に開いているが、会員は40歳代以上でありこの世代の人々にとっても旧方言は「学ぶ」対象となっている。今回の調査は1991年8月に以下の人々に御協力頂いて行った。比屋根勇（明治44年生まれ）、長田紀良（大正6年生まれ）、田場由盛（昭和7年生まれ）、富川せん（昭和50年生まれ）。

### 7.1 母音

旧方言の基本母音は4母音である。全国共通語のアにはア、イには中舌母音の [i]、ウにはウ、エにはイ、オにはウが対応する。エに対しては [ne:ɾa] 「右」、オに対しては [bo:] 「棒」のように二重母音から変化した長母音が旧方言に存在し新方言に適用したものである。従って新方言では共通語同様5母音がある。しかし、イの音が旧方言では中舌母音であるの

で老年層では新方言の発音に際し時々 [i] と [ɪ] でゆれる事が観察された。しかし、全国共通語化の為であろうが中年層の旧方言の発音では弁別の特徴を持つ中舌母音の発音が困難になっており、従って新方言のイの発音がゆれる事はない。また、ウの音が旧方言では円唇母音であり、新方言でも全世代を通じて円唇母音で発音している。また、エが旧方言では [je] と発音される事から老年層や中年層では新方言でも [jeda] 「枝」、[jeɹi] 「襟」と発音するが、若年層では [ʔe] と発音している。また、旧方言では一拍語が長呼されるが老年層や中年層ではその習慣を新方言に受け継ぎ [ki:] 「木」、[me:] 「目」と長呼するが、若年層ではこの習慣も失っている。全世代を通じて「映画」や「英語」のエイが [e:] とならず [ei] と発音されている。

## 7.2 子音

特徴的な子音としてラ行の音があげられる。旧方言では全国共通語のように弾き音 [ɾ] ではなく英語の /r/ のように摩擦性の強い [ɹ] であり、新方言の発音においても中年層までは [ɹ] で発音している。旧方言ではエが [je] と発音される事からセの音が中年層まで [je] で発音される。ゼも同様に [dʒe] と発音される。老年層では中舌母音の影響を受け「月」や「夏」のツが [tsu] と [tsɪ] の間でゆれる事がある。「写真」は旧方言では [sajɪn] と発音されるが新方言では [ʃajɪn] と発音されている。これはおそらく拗音と直音の音韻的に区別の無い沖縄本島から移入された語であろうと思われる。沖縄本島では老年層は新方言においても [sajɪn] と発音しているが、音韻的に直音と拗音の区別のある石垣では新方言では [ʃajɪn] と発音している。[kwaji] 「菓子」と老年層では発音しており、音韻的に /kwa/ が存在する。

## 7.3 アクセント

旧方言のアクセントは二拍名詞は 1・2 類が ●○、●○▷、3・4・5 類が ○○、○○▷ となり、一拍名詞は 1・2 類が長呼されて ●○、●○▷、3 類が ○○、○○▷ となる。老年層や中年層では旧方言のアクセントが安定していて、新方言のアクセントも旧方言の類推から旧方言のアクセントを引き継いでいる。例えば、1 類の「鼻」は ●○、●○▷、3 類の「花」は ○○、○○▷ と新方言では発音される。しかし、若年層は旧方言を習得しておらず必然的に旧方言のアクセントの影響を受けていない。新方言のアクセントは無アクセントになっている。テレビ等の影響、学校教育で全国共通語のアクセントを理解していないか質問したところアクセントの型の区別の存在にも気づいていなかった。

## 7.4 新方言の音節表

新方言の音節表を共通語と対応して示す事にする。第一期の話者の新方言を中心に示す事にする。

/a/[ʔa]	/i/[ʔi]	/u/[ʔu]	/e/[je]	/o/[ʔo]
/ka/[ka]	/ki/[ki]	/ku/[ku]	/ke/[k'e]	/ko/[ko]

/sa/[sa]	/si/[ʃi]	/su/[su]	/se/[ʃe]	/so/[so]
/ta/[ta]	/ti/[tʃi]	/tu/[tsu]	/te/[tʰe]	/to/[to]
		~[tsi]		
/na/[na]	/ni/[ni]	/nu/[nu]	/ne/[ne]	/no/[no]
/ha/[ha]	/hi/[çi]	/hu/[Φu]	/he/[hʰe]	/ho/[ho]
/ma/[ma]	/mi/[mi]	/mu/[mu]	/me/[mʰe]	/mo/[mo]
/ja/[ja]		/ju/[ju]		/jo/[jo]
/ra/[ra]	/ri/[ri]	/ru/[ru]	/re/[rʰe]	/ro/[ro]
/wa/[wa]				
/ga/[ga]	/gi/[gi]	/gu/[gu]	/ge/[gʰe]	/go/[go]
/za/[dza]	/zi/[dzi]	/zu/[dzu]	/ze/[dʒe]	/zo/[dzo]
/da/[da]			/de/[dʰe]	/do/[do]
/ba/[ba]	/bi/[bi]	/bu/[bu]	/be/[bʰe]	/bo/[bo]
/pa/[pa]	/pi/[pi]	/pu/[pu]	/pe/[pʰe]	/po/[po]
/fa/[Φa]	/fi/[Φi]		/fe/[Φʰe]	/fo/[Φo]
/kja/[kja]		/kju/[kju]		/kjo/[kjo]
/sja/[ʃa]		/sju/[ʃu]		/sjo/[ʃo]
/tja/[tʃa]		/tju/[tʃu]		/tjo/[tʃo]
/nja/[nja]		/nju/[nju]		/njo/[njo]
/hja/[çja]		/hju/[çju]		/hjo/[hjo]
/mja/[mja]		/mju/[mju]		/mjo/[mjo]
/rya/[rja]		/rju/[rju]		/rjo/[rjo]
/gja/[gja]		/gju/[gju]		/gjo/[gjo]
/zja/[dʒa]		/zju/[dʒju]		/zjo/[dʒo]
/bja/[bja]		/bju/[bju]		/bjo/[bjo]
/pja/[pja]		/pju/[pju]		/pjo/[pjo]
/kwa/[kwa]				

～はゆれのある事を示している。

## 8. 波照間島

波照間島は八重山群島に属し面積12.45km<sup>2</sup>、日本最南端の島である。現在人口660人で、年々人口が減少しつつある。産業として砂糖黍生産しか無く中学校を出ると進学就職共に島外へでなくてはならない。嫡子制度が強く残っており長男は島に帰るが女は島に戻らず必然的に新生児による人口増加が望めない。ちょうど調査の折、無形重要文化財に指定されてい

る「精霊」から音変化したソーレーと呼ばれる盆踊りを一週間後にひかえ準備のための練習中であったが人口減少のため踊り子の数を集めるのが問題になっているという事であった。また、島外へ出るのには石垣を經由しなければならず、新方言でも石垣新方言の影響を受けつつある。「沖縄語辞典」\*<sup>36</sup>によると方言的には八重山方言群に属し、音韻的には石垣市方言と類似しているが、[me:]「前」、[mè:]「米」の様に中舌母音の [è] が [e] と音韻対立しているのが特徴的である。調査は1991年8月に行った。浦仲浩（大正13年生まれ）、安里正（昭和11年生まれ）、金嶺一彦（昭和33年生まれ）、富底利一（昭和43年生まれ）、本比田としゆき（昭和51年生まれ）、西島本さとる（昭和52年生まれ）の諸氏に御協力頂いた。昭和43年生まれの富底利一氏は15歳から那覇や名古屋に滞在し、旧方言は理解はできるが使用する事ができず、同じ島のものに対しては波照間新方言、著者に対しては全国共通語を使用するというように新方言と全国共通語の二言語話者になっている。

### 8.1 母音

旧方言は基本的には4母音である。全国共通語のアにはア、イには中舌母音の [i]、ウにはウ、エにはイ、オにはウが対応する。エには [pe:]「灰」「蠅」、オには [so:]「竿」という長母音があり、旧方言の発音にも5母音があり、新方言では5母音を習得している。ウの音が旧方言では円唇母音であり、新方言でも全世代を通じて円唇母音で発音している。また、エが旧方言では [je] と発音される事から老年層や中年層では新方言でも [jeda]「枝」、[jeri]「襟」と発音するが、若年層では [ʔe] と発音している。また、旧方言では一拍語が長呼されるが老年層や中年層ではその習慣を新方言に受け継ぎ [ki:]「木」、[me:]「目」と長呼するが、若年層ではこの習慣も失っている。富底利一氏は一拍語長呼の習慣も新方言では長呼、全国共通語では短呼と使い分けている。全世代を通じて「映画」や「英語」のエイが [e:] とならず [ei] と発音されている。富底氏は [èi] と [e:] を使い分ける。

### 8.2 子音

旧方言ではエが [je] と発音される事からセの音が中年層まで [ʃe] で発音される。ゼも同様に [dʒe] と発音される。旧方言ではハ行音ではハ行音はハ [pa]、ヒ [pi]、フ [Fu]、へ [pi]、ホ [pu] と [p] 音で発音されるが、帯気性が強く [p<sup>h</sup>] に聞こえる。新方言の発音でもハ行音は帯気性が感じられる。また、全国共通語のイ段が中舌母音の [i]、エ段がイに対応しているが、中舌母音 [i] の影響でシが [ʃi] と [si] の間でゆれる事が老年層ではある。反対に、若年層では旧方言の中舌母音は音韻的に区別できるが発音に問題があり、従って新方言でシを中舌母音で発音する事はなくなる。

### 8.3 アクセント

旧方言のアクセントは二拍語の1・2類が○○、○○▷、3・4・5類が○●、○●▶となり、一拍語は長呼されて1・2類が○○、○○▷、3類が○●、○●▶となる。新方言のアクセントでは老年層は旧方言のアクセントを踏襲している。例えば、1類の「鼻」は○○、

○○▷、3類の「花」は○●、○●▶と発音する。若年になると旧方言のアクセントを習得しておらず、新方言のアクセントは無アクセントになる。在外歴の長い富底氏は旧方言のアクセントを継いだ新方言のアクセントとゆれる事があるが全国共通語のアクセントを使い分けようとする意識を持っている。

#### 8.4 新方言の音節表

新方言の音節表を共通語と対応して示す事にする。第一期の話者の新方言を中心に示す事にする。

/a/[ʔa]	/i/[ʔi]	/u/[ʔu]	/e/[je]	/o/[ʔo]
/ka/[ka]	/ki/[ki]	/ku/[ku]	/ke/[k <sup>j</sup> e]	/ko/[ko]
/sa/[sa]	/si/[ʃi]	/su/[su]	/se/[ʃe]	/so/[so]
	~[sī]			
/ta/[ta]	/ti/[tʃi]	/tu/[tsu]	/te/[t <sup>j</sup> e]	/to/[to]
/na/[na]	/ni/[ɲi]	/nu/[nu]	/ne/[ɲe]	/no/[no]
/ha/[ha]	/hi/[çi]	/hu/[Φu]	/he/[h <sup>j</sup> e]	/ho/[ho]
/ma/[ma]	/mi/[mi]	/mu/[mu]	/me/[m <sup>j</sup> e]	/mo/[mo]
/ja/[ja]		/ju/[ju]		/jo/[jo]
/ra/[ra]	/ri/[ri]	/ru/[ru]	/re/[r <sup>j</sup> e]	/ro/[ro]
/wa/[wa]				
/ga/[ga]	/gi/[gi]	/gu/[gu]	/ge/[g <sup>j</sup> e]	/go/[go]
/za/[dza]	/zi/[dʒi]	/zu/[dzu]	/ze/[dʒe]	/zo/[dzo]
/da/[da]			/de/[d <sup>j</sup> e]	/do/[do]
/ba/[ba]	/bi/[bi]	/bu/[bu]	/be/[b <sup>j</sup> e]	/bo/[bo]
/pa/[p <sup>h</sup> a]	/pi/[p <sup>h</sup> i]	/pu/[p <sup>h</sup> u]	/pe/[p <sup>h</sup> j <sup>j</sup> e]	/po/[p <sup>h</sup> o]
/fa/[Φa]	/fi/[Φi]		/fe/[Φ <sup>j</sup> e]	/fo/[Φo]
/kja/[kja]		/kju/[kju]		/kjo/[kjo]
/sja/[ʃa]		/sjju/[ʃju]		/sjo/[ʃjo]
/tja/[tʃa]		/tju/[tʃju]		/tjo/[tʃjo]
/nja/[nja]		/nju/[nju]		/njo/[njo]
/hja/[çja]		/hju/[çju]		/hjo/[çjo]
/mja/[mja]		/mju/[mju]		/mjo/[mjo]
/rya/[rja]		/rju/[rju]		/rjo/[rjo]
/gja/[gja]		/gju/[gju]		/gjo/[gjo]
/zja/[dʒa]		/zju/[dʒju]		/zjo/[dʒjo]
/bja/[bja]		/bjju/[bjju]		/bjo/[bjjo]

/pja/[p<sup>h</sup>ja]/pju/[p<sup>h</sup>ju]/pjo/[p<sup>h</sup>jo]

～はゆれのある事を示している。

## 9. 与那国島

与那国島は面積28.52km<sup>2</sup>、日本の最西端の島で人口約1900人の島である。かつては台湾に最も近い島ということで戦後密貿易の中心地となり人口20000人を越えていた。筆者が調査\*<sup>37</sup>を行った約13年前前の人口も1900人ぐらいで最盛期の20000人の十分の一になったとはいえ現在でも同数の人口を抱え一応安定した人口構成をなしている。しかし、13年前には就業や就学のため在住はしていなかったが空き家にはいつか帰島する意識があり位牌が置いてあったが、今では墓を掘り起こし先祖の骨を移住の地に移し先祖代々の島を捨てる人々も多くなった。言語生活面でも中年層からは旧方言が使われる事が少なくなり新方言に移りつつある。また、与那国の新方言は他の沖縄地域の新方言と異なる特徴を有していたが若年層の新方言が那覇新方言の影響を受けつつあるのも観察された。与那国旧方言は大きく他の沖縄方言と異なり旧方言の位置づけは「沖縄語辞典」\*<sup>38</sup>によると琉球方言を第一下位分類した奄美・沖縄方言群と先島方言群と同一位置を与えられている。調査は1991年8月以下の人々に御協力を頂いた。牧野満（大正7年生まれ）、池間苗（大正8年生まれ）、嵩西一雄（大正15年生まれ）、前富里公一（昭和22年生まれ）、池間有史子（昭和24年生まれ）、小林つみえ（昭和26年生まれ）、田島ミカ（昭和46年生まれ）、東浜リカ（昭和50年生まれ）、長浜秀和（昭和50年生まれ）。

### 9.1 母音

旧方言の母音は3母音である。同じ3母音を基調とする沖縄本島旧方言は母音の融合によって生じたエヤオが存在するが、与那国旧方言では融合してもエヤオにならず、エとオは欠落している。平山輝男・中本正智氏\*<sup>39</sup>によると、イの調音点は全国共通語のイからエまで、ウの調音点はウからオまでと広く発音されている。従って全国共通語を習得する際には他の沖縄地域と異なり音韻的にエとオを獲得しなければならない。新方言の発音で老年層においてはオとウがぐだけた会話になると混同を起こす事があるが、注意すると音韻的に区別を有している。例えば、「太鼓」を [taik<sup>?</sup>u] と [taik<sup>?</sup>o] ともいうが、注意を促すと [taik<sup>?</sup>o] になる。5母音は獲得している。旧方言ではウは円唇性を持って発音されるが、新方言の発音においても全世代を通じて円唇母音である。エの音は老年層から中年層まで [je] で発音されるが、若年層は [ʔe] になっている。一拍語は旧方言では長呼されるが老年層から中年層までは新方言においても長呼の習慣を引き継いでいる。若年層になると長呼の習慣はなくなる。高校生でありながら祖母と同居していて旧方言を使う長浜秀和氏は旧方言では長呼、新方言では短呼と使い分けがある。「英語」のエイが全世代 [ei] と発音される。



## 9.2 子音

エの発音が [je] となることからセが [se] となりゼが [dʒe] となるが、同様に全ての子音の後の [e] も [je] となり、テなども [tʰe] と発音される習慣が中年層まで続いている。与那国旧方言では他の沖縄にない [g] と [ŋ] の音韻的対立がある。全国共通語の語頭のカ行音に対応する旧方言の音は [g] 音で、語中語尾のカ行音はガは [ŋa]、ギは [gi]、グは [ŋu]、ゲは [ŋi]、ゴは [ŋu] と対応し、ギとゲは鼻音の対立で区別を保っている。新方言においても語頭のカ行音は全て [g] 音であるが、語中における助詞の「が」は [ŋa] と発音する習慣が中年層まで引き継がれている。しかし、「道具」は旧方言では [dugu] となるが新方言では [do:gu] と発音され旧方言の音韻的対立をそのまま受けつないではない。おそらく、助詞の「が」は旧方言でも [ŋa] で頻繁に使われるために新方言の発音にも適用したものであろう。また、語中のカ行音に対応する旧方言の音は [sagi] 「酒」、[naga] 「中」、[kagun] 「書く」のように [g] 音が使われている事も影響しているのであろう。与那国旧方言の他の先島方言と大きく異なる特徴として、奄美方言と同じように無気喉頭化音と有気非喉頭化音の音韻的対立を有する。「来る」が [kun]、「吹く」が [kʰun] となり、語頭の共通語の CVC に対応する /t, k, tʃ/ が喉頭化する。そして、/p/ および語中における /t, k, tʃ/ は喉頭化する傾向を示す。即ち、語頭においては喉頭化音と非喉頭化音は音韻的対立を持つが、語中及び語尾では全ての破裂音は喉頭化される。新方言の発音においても中年層までは語中の /t, k, tʃ/ が喉頭化している。例えば、「蓋」は [Φutʰa] と、「肉」は [nikʰu] と、「パン」は [pʰan] と発音される。また、語頭においても語形が類似している [tʃi] 「血」「乳」は喉頭化して発音されている。しかし、若年層は喉頭化を保持していない。老年層においては「菓子」を [kwafi] と発音し /kwa/ という音韻を持っている。

## 9.3 アクセント

旧方言のアクセントは多型で二拍語の 1・2 類が ○●、○●▶、3 類が ○○、○○▷、4・5 類が ○●、○●▶、一拍語の 1・2 類が ●●、●●▶、3 類が ○○、○○▷ となる。新方言のアクセントは老年層において旧方言のアクセントを踏襲している。旧方言のアクセントは安定しており、それに対応する新方言のアクセントも安定している。中年層に属する前富里公一氏は旧方言のアクセントを習得しているが、新方言の発音で 4・5 類が ○●、○●▶ となり、拍内下降を失っている。13年前に世代別に行った調査では旧方言、新方言共に拍内下降拍が失われ易い事が分かっている\*<sup>40</sup>。若年層は旧方言のアクセントからの類推が働かず無アクセントになっている。旧方言の文音調では句の区切りに上昇調があり、その影響で新方言では ○●、○○▶ のように句の最後が上昇する傾向がある。

## 9.4 新方言の音節表

新方言の音節表を共通語と対応して示す事にする。第一期の話者の新方言を中心に示す事

にする。

/a/[ʔa]	/i/[ʔi]	/u/[ʔu]	/e/[je]	/o/[ʔo]
/ka/[ka]	/ki/[ki]	/ku/[ku]	/ke/[k <sup>ɰ</sup> e]	/ko/[ko]
~[kʔa]	~[kʔi]	~[kʔu]	~[kʔ <sup>ɰ</sup> e]	~[kʔo]
/sa/[sa]	/si/[ʃi]	/su/[su]	/se/[ʃe]	/so/[so]
/ta/[ta]	/ti/[tʃi]	/tu/[tsu]	/te/[tʰe]	/to/[to]
~[tʔa]	~[tʃʔi]	~[tsʔu]	~[tʔ <sup>ɰ</sup> e]	~[tʔo]
/na/[na]	/ni/[ɲi]	/nu/[nu]	/ne/[ɲe]	/no/[no]
/ha/[ha]	/hi/[çi]	/hu/[Φu]	/he/[h <sup>ɰ</sup> e]	/ho/[ho]
/ma/[ma]	/mi/[mi]	/mu/[mu]	/me/[m <sup>ɰ</sup> e]	/mo/[mo]
/ja/[ja]		/ju/[ju]		/jo/[jo]
/ra/[ra]	/ri/[ri]	/ru/[ru]	/re/[r <sup>ɰ</sup> e]	/ro/[ro]
/wa/[wa]				
/ga/[ga]~[ɲa]	/gi/[gi]	/gu/[gu]	/ge/[g <sup>ɰ</sup> e]	/go/[go]
/za/[dza]	/zi/[dʒi]	/zu/[dzu]	/ze/[dʒe]	/zo/[dzo]
/da/[da]			/de/[d <sup>ɰ</sup> e]	/do/[do]
/ba/[ba]	/bi/[bi]	/bu/[bu]	/be/[b <sup>ɰ</sup> e]	/bo/[bo]
/pa/[pʔa]	/pi/[pʔi]	/pu/[pʔu]	/pe/[pʔ <sup>ɰ</sup> e]	/po/[pʔo]
/fa/[Φa]	/fi/[Φi]		/fe/[Φ <sup>ɰ</sup> e]	/fo/[Φo]
/kja/[kja]		/kju/[kju]		/kjo/[kjo]
~[kʔja]		~[kʔju]		~[kʔjo]
/sja/[ʃa]		/sju/[ʃu]		/sjo/[ʃo]
/tja/[tʃa]		/tju/[tʃu]		/tjo/[tʃo]
~[tʔʃa]		~[tʔʃu]		~[tʔʃo]
/nja/[nja]		/nju/[nju]		/njo/[njo]
/hja/[çja]		/hju/[çju]		/hjo/[çjo]
/mja/[mja]		/mju/[mju]		/mjo/[mjo]
/rya/[rja]		/rju/[rju]		/rjo/[rjo]
/gja/[gja]		/gju/[gju]		/gjo/[gjo]
/zja/[dʒa]		/zju/[dʒju]		/zjo/[dʒjo]
/bja/[bja]		/bju/[bju]		/bjo/[bjo]
/pja/[pja]		/pju/[pju]		/pjo/[pjo]
~[pʔja]		~[pʔju]		~[pʔjo]
/kwa/[kwa]~[kʔwa]				

無声の破裂音、破擦音の行には～で示しているが、語頭では非喉頭化音、語中語尾では喉頭化音になることを示している。

## 10. まとめ

奄美から与那国というように琉球方言の使われている全地域を見てきたが、新方言の音韻、アクセントに関して以下のように結論づける事ができる。老年層の属している第一期の話者達はあくまで旧方言が母語であり、新方言は旧方言の音韻、アクセント体系を引き継いでいる。ちょうど日本語母語話者が英語を学習するに当たり日本語の音韻体系に合わせて英語を発音するのと同様である\*<sup>41</sup>。中年層の属する第二期の話者は旧方言との接触の度合いに応じて差異はあるが新方言はより全国共通語に近くなっている。老年層と接触が多い中年層はより旧方言の影響を受けた新方言を話し、接触の少ない中年層はより全国共通語に近い新方言を話す。若年層の属する第三期の話者は旧方言の音韻、アクセント体系を継承せず、全国共通語の影響を受けている。反対に言うと若年層は後に旧方言を獲得しようとしても、音韻、アクセントの上では問題が起こる事が予測される。また、沖縄各地の旧方言に違いがありその旧方言を基盤に成立した新方言も地域によって異なっていたが、最近ではその新方言も中心地、例えば、石垣や那覇の新方言が拡大しつつあり統合の方向も見られた。今回の調査では老年層、中年層、若年層と大きく分けてみたが変化の過渡期にある中年層をより詳しく見る事によって失われ易い音韻的特徴、失われにくい音韻的特徴といったより細密な調査が必要と思われる。全体的にみると音声面では音価が異なるが共通語の音韻はどの地域でもほぼ問題がなく獲得している。問題は声門閉鎖音による対立を保つ老年層ではエが [je] となる事からセとシェ、ゼとジェの区別ができず外来音に問題が起こる。沖縄本島では直音と拗音の音韻的対立が旧方言にない事からサとシャ、スとシュも問題が起こる。新方言がどの様になっているかを具体的にみると、

A. 母音の違い。5母音の獲得については全地域、全世代問題なく習得している。与那国においては音韻的にア、イ、ウの3母音しか存在せずエとオの2母音を習得する必要があったが、老年層のみくつろいだ会話ではイとエ、ウとオがゆれる事はあるが注意すると区別ができる。他の地域には母音の融合によって生じた長母音が旧方言に存在し、代入するだけの事であり問題が起こらない。しかし、個々の音としてエが旧方言では [je] と発音される事から老年層では勿論中年層に到るまで [je] となる。これは単に母音の問題だけでなくエ列の音が全て [je] となり、目立つ音としてはセが [je]、ゼが [dʒe] となる。しかし、若年層は全国共通語と同じになっている。また、ウの音が旧方言では奄美を除いたほとんどの地域で円唇母音であるが、これについては全地域、全世代円唇母音性を引き継いでいる。また、宮古、八重山では中舌母音が音韻的に存在し、新方言の発音にも老年層はゆれる事はあるが中舌母音が常に使われることはない。エイが旧方言では [ei] と発音されるが、どの地域で

もほぼ全世代に渡り旧方言の発音を引き継いでいる。

B. 声門閉鎖音による音韻的対立。奄美、沖縄本島では声門閉鎖音によってア行とワ行の音韻的対立を保っている。Aの母音の違いで示したようにア行のエが声門閉鎖を伴わないで発音される事から [je] と発音されるという問題にも及んでくる。また、旧方言で声門閉鎖音によりア行とワ行の区別を持っている老年層ではキヤヲという音韻をイヤオと別個に保持している。旧方言の音韻的体系を新方言の発音にも及ぼしたものである。そして、戦前の書き言葉ではキヤヲをイヤオと書き分けているところからも影響されたものと思われる。しかし、若年層では全国共通語の影響で声門閉鎖による音韻的対立を失っている。

C. 無気喉頭化音と有気非喉頭化音による音韻的対立。奄美、与那国では喉頭化音は音韻的対立を持っているが、老年層では、奄美ではクは喉頭化音で発音され、与那国では語中の /t,tʃ,p,k/ に喉頭化音が聞かれる。これらの地域の老年層の母語である旧方言の音韻体系では喉頭化の有無は音韻的対立であり新方言で発音する際にも旧方言の音韻体系を適用している事を示している。また、奄美、沖縄本島、与那国島等の多くの地域で外来語のバ行音は喉頭化している。音韻的に対立を示さない地域においても調音的習慣として喉頭化音を残している事になる。沖縄出身者が全国共通語を発音する際の特徴に聞こえる詰まった音は喉頭化音を残していることに起因する事が多い。しかし、この音韻的対立も若年層では失われている。

D. 一拍語の長呼。奄美以外の全地域で旧方言の一拍語は長呼されるが一般にこの習慣も新方言の中に老年層および中年層まで引き継がれている。若年層は共通語の影響で一拍語は長呼されなくなっている。

E. 共通語アクセントの習得。沖縄では多型アクセント、二型アクセント、無アクセントと地域によって旧方言のアクセント体系は異なるが、新方言のアクセント習得という面においては同様の過程を経ている。旧方言のアクセント体系の確立している老年層は新方言の発音においても旧方言のアクセント体系を踏襲している。今回の調査では基礎語彙を選んだので語形の類推が効き旧方言のアクセントで共通語のアクセントを発音している。旧方言を習得していない若年層は旧方言からの類推が効かず多くの地域では無アクセントになっている。しかし、若年層はテレビ、学校教育のため全国共通語のアクセントを完全ではないが習得しようとする様子がみられる。本来無アクセント地域である宮古では全世代に渡り無アクセントである。アクセントについては、今回は基本語彙を選んだため旧方言と新方言の比較ができ新方言にも旧方言の類推が効いたが、次回は語形の違う語でも調査すべきであると思っている。また、潜在アクセント\*<sup>42</sup>も調べる必要があるかと思う。

この方面の研究は、旧方言の消滅という面からみれば、言語の消滅という問題になる。日本語の方言の中では共通語化のために各地方言が消えつつあるが本土方言では共通語と方言

が近いと言語消滅の問題にはならない。日本ではアイヌ語の消滅と共に旧方言の消滅の過程の研究は言語消滅の問題となる\*43。また、新方言の問題は言語干渉の問題となる。旧方言から共通語の影響の元に発達した新方言の問題は本来の母語が目的言語と異なる場合どの様に影響を残すかという問題に発展する。また、旧方言と新方言の使い分けの問題は二言語使用という問題に発展する。これらの三つの問題のどの面からみても沖縄の共通語化はいろんな興味のある問題を提起してくれるものと思う。しかし、現在のところ旧方言そのものの記述の問題に方言学者の努力が集中していてこちらの方言からの研究は少ない。今後の研究が望まれるところである。次回の調査では一地域に焦点を絞り全世代にわたり言語面及び社会面から見ていきたいと思っている。

- \* 1 服部四郎「言語年代学即ち語彙統計学の方法について」『言語研究』26・27、1954
- \* 2 外間守善「沖縄の言語史」法政大学出版局、1971に沖縄における共通語教育の歴史が載せられている。また、本永守靖「明治期における沖縄県の国語科教育」『琉球大学教育学部紀要27』1984では明治期の国語教育の姿を当時の政令や文部省規則等の公文書資料をあげて示している。
- \* 3 本永守靖「南島方言と国語教育」『講座方言学10 沖縄・奄美の方言』国書刊行会、1984は国語教育の立場から沖縄で使われている共通語の誤りを示したものである。その中で、全国共通語の影響を受けてはいるが沖縄方言的なまわりを残した沖縄独特の地域的共通語の定着を述べている。日本各地からの移民によって構成されている北海道においても共通の北海道共通語が二世、三世の間でできあがった事が分かっている。
- \* 4 比較言語学が同系統の言語を比較する事により系統関係を、また、祖形を探る事に研究の目的があるのに対し、対照言語学は系統の異なる言語を対照して類似点及び差異を研究する事に目的がある。主に、母語と外国語を対照する事によって外国語教育を行う際に起こる母語の干渉を調べるために発展した。Di Pietro, Robert J. "Language Structures in Contrast" (1971) (「言語の対照研究」小池生夫訳、大修館書店、1974)は対照言語学の理論及び実践を示した初期の出版物であるが、外国語教育の立場からその後対照研究に多くの問題点が示された。
- \* 5 永田高志「沖縄に生まれた共通語 文法編」『琉球の方言15』法政大学沖縄文化研究所、1990
- \* 6 Weinreich, Uriel "Languages in Contact" (1953) (「言語間の接触」神鳥武彦訳、岩波書店、1976)は二言語併用の問題に最初に焦点を当てた研究書である。また、沖縄の二言語併用に関しては成田義光「沖縄における Bilingualism について」『国語学41』1960があげられる。
- \* 7 永田高志、津田葵他「沖縄県大里における共通語化」(SOPHIA LINGUISTICA 18), 1985では年齢世代が下がるに従って使用言語が旧方言から新方言に移行する様子場面別に待遇表現に焦点を当てて調査した結果を述べた。また、屋比久浩「ウチナーヤマトウグチとヤマトウチナーグチ」『国文学解釈と鑑賞173』1987では言語接触の観点から沖縄の共通語化の過程を述べている。
- \* 8 沖縄県庁学務課「沖縄対話」1880では、使用される分野別に共通語の会話文が上げられ下に沖縄旧方言での翻訳が記されている。外国旅行会話練習書のような体裁で編まれている。
- \* 9 桑江良行「標準語対照沖縄語の研究」崎間書店、1930では沖縄県出身の学生の誤り易い共通語の問題点を音韻、語彙に分けて対照辞書の体裁で編まれている。
- \* 10 二言語併用の類型については上記の Weinreich (1953) や Mackey, W. F. "The Description of

- Bilingualism” (Fishman, J. ed. “Readings in the Sociology of Language”. Mouton. 1970) や Lambert, W. E. et al. “The Influence of Language-acquisition Context on Bilingualism”. (Journal of Abnormal & Social Psychology, 56, 1958) に詳しい。
- \*11 永田高志・津田葵他「沖縄県大里における共通語化」(SOPHIA LINGUISTICA 18), 1985で旧方言の内敬体から消えていく事を示した。
  - \*12 城生伯太郎「現代日本語の音韻」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店、1977や粕谷英樹・佐藤滋「長音・二連母音と二重母音」『講座日本語と日本語教育 3 日本語の音声・音韻(下)』明治書院、1990に長母音の音韻的解釈の諸説が示されている。
  - \*13 大坪一夫「音声教育の問題点」『講座日本語と日本語教育 3 日本語の音声・音韻(下)』明治書院、1990では母音にはア、イ、ウの3母音しか存在しないアラブ人の日本語学習者はイとエ、ウとオを混乱すると書かれているが、共通語と対応は異なるが音韻的にエとオを持っている沖縄旧方言話者は音韻習得の面で異なった環境にある事が分かる。
  - \*14 声門閉鎖音のない場合は音韻的に/’/の記号で示す事にする。
  - \*15 中本正智「琉球方言音韻の研究」法政大学出版局、1976では奄美・沖縄旧方言の声門閉鎖音による音韻対立を調音点喉頭の摩擦と破裂による調音方法の違いという二次的特徴による示差性としている。
  - \*16 無気喉頭化音を [kʔ] のように [ʔ] で示す。
  - \*17 金田一春彦「アクセントから見た琉球方言の系統」『東京外語大論集』7、1960や平山輝男「私の方言区画 琉球諸方言のアクセント体系を材料として」日本方言研究会編『日本の方言区画』、東京堂出版、1964に沖縄旧方言のアクセントが九州のアクセントに連なる事を示している。
  - \*18 上村幸雄「琉球諸方言における『1・2音節名詞』のアクセントの概観」『ことばの研究』、1959に琉球諸方言のアクセント体系が示されている。この報告書の調査を行った1959年にも若年層のアクセントは共通語の影響があり在来方言のアクセントが変化している事を示している。
  - \*19 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局、1976
  - \*20 寺師忠夫「奄美方言、その音韻と文法」根元書房、1985
  - \*21 寺師忠夫「奄美方言、その音韻と文法」根元書房、1985
  - \*22 倉井則雄「トン普通語処方箋——シマの標準語をすっきりさせる法」自家版、1987は国語教育の立場から奄美で起こり易い共通語の誤りを示したものである。
  - \*23 春日正三「奄美諸島(本島)の方言」『講座方言学10 沖縄・奄美の方言』国書刊行会、1984および中本正智「琉球方言音韻の研究」法政大学出版局、1976に旧方言の音節表が載せられているので比較して欲しい。
  - \*24 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局、1976
  - \*25 平山輝男編「奄美方言基礎語彙の研究」角川書店、1986に音韻及びアクセントの記述がある。
  - \*26 中本正智「琉球方言音韻の研究」法政大学出版局、1976に旧方言の音節表が載せられているので比較して欲しい。
  - \*27 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局、1976
  - \*28 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局、1976
  - \*29 金城朝永「那覇方言概説」『金城朝永全集上巻』沖縄タイムス社、1974
  - \*30 文部省重点領域研究「日本語音声の韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」の琉球

列島班の報告書として、高江州頼子「沖縄における標準語（沖縄ヤマトグチ）のアクセントの実態」『沖縄言語研究センター資料No.97』1991では老年層から若年層にわたる一拍・二拍名詞のアクセント調査の結果を示しているが、本論文と同様な報告がなされている。

- \*31 中本正智「琉球方言音韻の研究」法政大学出版局、1976に旧方言の音節表が載せられているので比較して欲しい。
- \*32 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局、1976
- \*33 上村幸雄「琉球諸方言における『1・2音節名詞』のアクセントの概観」『ことばの研究』、1959
- \*34 平山輝男編「琉球宮古諸方言基礎語彙の総合的研究」桜楓社、1983
- \*35 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局、1976
- \*36 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局、1976
- \*37 永田高志「与那国方言の共通語化——社会言語的研究」『言語の世界2-1』、1984では共通語化の様子を世代差、性別を考慮にいれ社会言語学的調査を行った。
- \*38 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局、1976
- \*39 平山輝男、中本正智「琉球与那国方言の研究」東京堂出版、1964
- \*40 永田高志「与那国の言語変化」『言語の世界1-2』、1983では共通語化の過程を世代別に音韻、アクセント、語彙、文法の各面に渡り調査した。
- \*41 Takashi Nagata "Phonological Changes in the Speech of Japanese Immigrants in Hawaii" (SOPHIA LINGUISTICA 16), 1984で日系移民が日本語から英語に母語を変えていく様子を一世、二世、三世と分けて調べた。
- \*42 金田一春彦「潜在アクセントの提唱」『日本語音韻の研究』東京堂出版、1972では各地方言に基本的なアクセントパターンがあり新しく入った語、例えば、外来語や固有名詞にも方言によってアクセントが違う事を示している。新方言の外来語や固有名詞のアクセントが旧方言の潜在アクセントを引き継いでいるか、全国共通語のアクセントであるかは興味のある問題である。
- \*43 永田高志「ブラジル日系社会の日本語言語生活——パラナ州アサイを例に」『近畿大学文芸学部編集 文学・言術・文化2-2』、1990と「ブラジル日系人の言語生活——アサイ日系社会を例に」『移住研究No.28』、1991では日系社会で日本語が消滅する様子を世代別に調査した。